慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昔話に見られる想像力：客人歓待伝説から隣の爺型の昔話へ
Sub Title	
Author	川添, 裕希(Kawazoe, Hiroki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1987
Jtitle	三田國文 No.8 (1987. 12) ,p.9- 16
JaLC DOI	10.14991/002.19871200-0009
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19871200-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

昔話に見られる想像力

――客人歓待伝説から隣の爺型の昔話へ――

川添裕希

一

前稿では、異類女房型の昔話をとりあげて、その叙述の展開の基底にある構造と登場人物の属性のような表層のレベルとがどのような関係になっているかについて論じた。[1] そこでは、その基本構造とでも言うべきものを同じくしながらも、異類女房の属性に応じて、それが超自然的存在に変わるに従って、変形し複雑になってさまざまなタイプの話が存在した。そして、その解釈として、異類女房譚の主題は人間と自然とのバランスということであり、それが天人や妖怪のような超自然の存在を含めて日本人の自然に対する考え方、その分類観とでも言うべきものによって、話が変形し複雑になるということを考えてみた。

しかし、すべての昔話の主題が人間と自然とのバランスというわけではなく、話が変形し複雑になることを、すべて自然に対する分類観によって説明することはできない。また、登場人物の属性のような表層のレベルを同じくしながらも、その叙述の展開の基本構造を異にする複数のタイプの話が存在するような事例もある。それが、本稿でとりあげる「取っ付く引っ付く」と「大歳の客」の昔話である。ここでは、それらの話が昔話の中でどのように位置づけられるか、その叙述の展開の基底にある構造と表層のレベルとのつながりを分析する。そして、それをもとに、人間と外界の自然を媒介する境界的な存在のとらえ方の変化ということと関連づけて、昔話が構造的に安定してその形式を確立していくに際してどのような想像力が働いているかを考察して、前稿の補足としたい。

二

「取っ付く引っ付く」の話は財宝発見の昔話であるが、それはさらに叙述の展開の構造によって大きく三つに分けられる。[2]

一番複雑な構造をしたものは、いわゆる隣の爺型になっているものである。よく働く爺と怠け者の爺がいた。よい爺が畑を耕していると、「取っ付くか引っ付くか」という声がする。爺が「取っ付くなら取っ付け、引っ付くなら引っ付け」と大声で言うと、小判がいっぱい飛んで来て、爺の体に引っ付く。家に持ち帰り、婆と喜んでいると、隣の婆が来てうらやましがり、爺を山に行かせる。欲張り

爺が山の畑を耕していると、「取っ付くか引っ付くか」という声が聞こえてきたので、「うんと取っ付け、うんと引っ付け」と言うと、うんとくっ付いた。家に帰って見ると、体中松脂だらけである。そこへ婆がろうそくを落としたので、火がついて爺は大変な火傷をしたというものである。これをA型とする。分布は全国的であるが、特に中国四国地方に多く見られる。

次に、三人兄弟譚の形をとるものもある。三人の兄弟がいた。長男が使いに行くと、光り物が近づいて来て、「おぼさりたいだかさりたい」と言う。怖いので逃げ帰る。次男が行くが、これも逃げ帰る。三男が太い背負い縄を用意して行って、「おぼさりたからおぼされ、だかさりたからだかされ」と言うと、重いものがのしかかって来る。背負って帰り、家で見ると大判小判であったというものである。これをB型とする。これは、特に奄美諸島などの九州南部と東北日本に濃く分布している。

もう一つは、一人の男を主人公とするものである。化物が出るという所に、ある男が出かけて行く。夜中に「ばろんばろん」という声がする。「ばれたかったらばれろ」と言うと、化物が背中につく。家へ帰って下ろしてみると、金であった。これをC型とする。これも全国的に分布しているが、特に東北日本に多く見られる。

「取っ付く引っ付く」の昔話を図で表すと図1のようになる。

まず、A型は図1の①の部分（a_1 b_1 c_1 $+d_1$ $+e_1$）と②の部分（a_2 b_2 c_2 $-d_2$ $-e_2$）によって構成された二重の構造をもっている。主人公は、日常の住居を離れて山仕事へ行き、「取っ付くか引っ付くか」という声のする方へ向かうのであり、それは非日常的な一種の欠乏の状況と言えよう。そういう状況に身を置くことが、後に黄金などの富を得る前提条件になっているわけである。しかし、主人公が富を得る直接のきっかけになっているのは、「取っ付くか引っ付くか」という声に反応して、「取っ付かば取っ付け引っ付かば引っ付け」と言ったことである。その声に反応したからこそ黄金などが体についたのである。ところが、そのまねをする反主人公の場合も、主人公と同じ場所へ行き、日常の生活から離れた非日常的な欠乏の状況に身を置く。そして、先の主人公と全く同じように、「取っ付くか引っ付くか」の声に反応して、「取っ付かば取っ付け、引っ付かば引っ付け」と言ったのにもかかわらず黄金でなく松脂がついてしまう。全く同一の行動をして、それが対照的に成功と失敗に分かれてしまう。それは、主人公の方は勤勉な性格で反主人公の方は怠け者の性

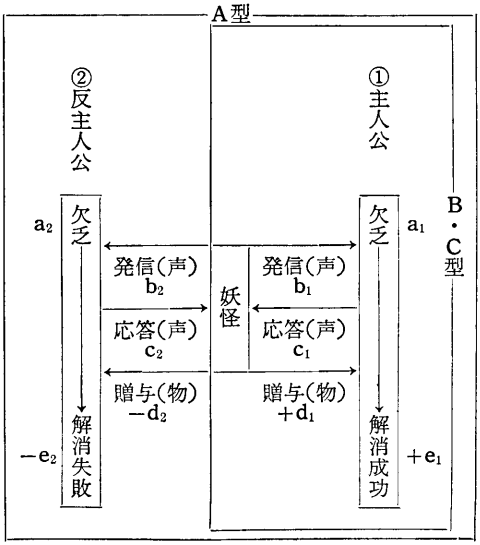

図1

格だからそうなったと説明できるかもしれないが、二人の行動の面では全くその違いは顕れていない。それから、「取っ付くか引っ付くか」という声を発するものは、話によっては木であるとか鳥であるとかと表現されている場合もあるが、多くの場合はっきりと表されていない。松脂がつくのだから、元来は木なのであろうが、その実体は明示されず声によってのみその存在が示される。

それでは、このA型の話を、いわゆる隣の爺型に分類されている昔話と比較してみよう。それは、「地蔵浄土」「鼠浄土」「雁取爺」「花咲爺」「鳥呑爺」「竹取爺」「舌切り雀」「瘤取爺」「猿地蔵」などの話である。「地蔵浄土」「鼠浄土」「猿地蔵」「舌切り雀」「瘤取爺」では、主人公に宝物を与えて反主人公に罰を加えるものが、動物であれ地蔵や鬼のような空想の存在であれ、はっきりとした形象をもっている。また、主人公と反主人公の行動は全く正反対で、それがそれぞれの成功と失敗につながっている。例えば、「地蔵浄土」では主人公がうまく鶏のまねをして鬼を退散させて宝物を得るのに対して、反主人公は笑ってしまって失敗する。また、「鼠浄土」では、主人公が猫のまねをしないで鼠から宝物を得るのに対して、反主人公は猫のまねをして失敗する。「猿地蔵」では、主人公は地蔵になりすまして猿から宝物を得るが、反主人公は笑って失敗する。「瘤取爺」でも、主人公はうまく踊って鬼に瘤を取ってもらうのに対して、反主人公は踊りが下手で失敗する。「舌切り雀」では、主人公の爺は小さいつづらを選んで成功し、反主人公の婆は大きいつづらを選んで失敗する。しかし、すべての隣の爺型の昔話がこのように整った構造をしているわけではない。「鳥呑爺」では、鳥を呑み込んだ主人公が殿様の前でうまく屁が出てほうびをもらい、全く同一のことをした反主人公が殿様の前でうまく屁が出なくて罰せられる。主人公が富を得るきっかけは、鳥を呑み込んで超自然的な力を得たことであるが、主人公に直接ほうびを与えて反主人公を罰するのは殿様（人間）であり、そこにずれがある。また、「花咲爺」「雁取爺」でも同様に、主人公と反主人公の行動は全く同一であるにもかかわらず、主人公は常に成功して反主人公は常に失敗する。また、その賞罰をもたらすものが、犬から木へ竹に変化したり、さらに灰に変化したりして、固定した形をとっていない。これらの話や「取っ付く引っ付く」のA型の話は、形式的に完成された隣の爺型に行き着く前の原型を示しているのであろう。

B型の話は、図1の①の部分だけによって構成された構造をしている。B型の話は、図1の①の部分がその構造の中心になっているが、全く反主人公に関する部分がないわけではない。そこでは、主人公に対して他の兄弟たちが反主人公になっていて、その反主人公が失敗をする。けれども、その失敗というのは、主人公と同一の行動をした結果ではなく、反主人公が怖くて逃げてしまったためである。しかも、それは主人公が行動を開始する以前のことである。したがって、反主人公が登場しても②の部分のC以下はなく、この話全体は（$a_2 d_2 c_0 \cdots a_1 b_1 c_1 d_1 e_1$）で表すことができる。これでは、反主人公はその臆病さによって、主人公の勇敢さを強調しているに過ぎない。

C型の話には、主人公はけっして勇敢な者ではなく臆病者であったが、意外にも化物の出る所へ出かけて行ったというものもある。新潟県の話では、臆病だった男に、あるときにその妻が便所に夕顔をつるし、便所に化物が出るからつかまえて来いと言ってそれを取

って来させ、煮て食わせて「化物とはこんなものだ。」と言うと、男の臆病が治ったというような話が加わっているものもある。[3] C型では、その話の構造が単純なために、こうした笑話化が見られるのであろう。

ところで、B型とC型の話の基本構造である①の部分は、「桃太郎」「一寸法師」などの異常出生の英雄冒険の昔話の叙述の基底にある構造と同一であるとも言よえう。しかし、そこにはかなりな相違点があることも確かである。まず第一に、主人公の属性が異なる。英雄冒険の昔話では、それが小さ子などの異常出生児であるのに対して、「取っ付く引っ付く」の話の方では、単なる人間に過ぎない。また、英雄冒険の昔話では、主人公が鬼が島などのようにかなり遠方の異界とでも言うべき場所へ移動するのに対して、「取っ付く引っ付く」の話の方では、山の中へ行くだけであり、それは人間の住むところの境界に位置する場所に過ぎない。それから、英雄冒険の昔話では主人公が積極的に働いて鬼などを征伐するのに対して、「取っ付く引っ付く」の話では、主人公は化物の声に対して「取っ付かば取っ付け、引っ付かば引っ付け」と応答するだけである。さらに、英雄冒険の昔話では、柳田国男が指摘したように妻まぎを伴うのが普通であるのに対して、[4]「取っ付く引っ付く」の話では、単なる富の獲得に終わっている。

ここにあげた相違は、単に「取っ付く引っ付く」の話というよりは隣の爺型の昔話一般と異常出生の英雄冒険の昔話とに見られる相違と言っていいだろう。日本の昔話の中で富を獲得する話には、大きく二つの系列がある。一つは、ある意味では神話の系譜を引く異常出生児を主人公とするものであり。もう一つは、単なる人間を主人公とするものである。そこには、主人公の属性のみならず、富を獲得するための行動や獲得される富のあり方などの上にも相違がある。そして、後者においては、主人公が化物を退治するなどの積極的な行動をせず、話の構造があまりに単純すぎるために、隣の爺型のように反主人公の失敗を伴った複雑な構造をもつようになるか、あるいは笑話や事実譚になってしまうわけである。「取っ付く引っ付く」の昔話は、こうした流れの中に位置づけられるであろう。

三

次に、「取っ付く引っ付く」の話と同じように、その中に構造の異なるタイプの話を含んでいる「大歳の客」の話をとりあげよう。

大歳の夜に貧しい家に乞食や座頭が来て宿を乞う。そこで、にわ（土間）の隅にむしろを敷いてそこに寝させる。翌朝見ると黄金になっている。あるいは、井戸に落っこちたのを引き上げてやったり、便所に落ちたのをきれいにして寝かせたりして、翌朝見ると黄金になっていたという話もある。さらに、乞食や座頭が居眠りして炉の火に転げ込んで焼け死んで、その死体が黄金になるという話もある。そして、こうして黄金を獲得したのを隣人が聞いてまねをして、全く同じように乞食や座頭を呼んで無理やりに泊まらせ、無理やりに井戸や便所に落としたりするが、何も得られない。これは、図1の①の部分と②の部分によって構成された隣の爺型になっている。これをA型とする。しかし、もう一つのタイプとして、A型の前半すなわち図1の①の部分だけによって構成されているものがある。これをB型とする。

「大歳の客」の昔話は、常陸国風土記筑波郡の富士筑波の話、備

後国風土記逸文（『釈日本紀』所引）の蘇民将来巨旦将来の話など の客人歓待を主題とした伝説と深いつながりがあるように見える。しかし、これらの伝説では、訪れるものは乞食ではなく神である。また、構造の面では、客人を歓待しない側については、客人を拒絶した事実が前半でそしてその不幸な結末が後半で簡単に述べられるだけで、一つながりの叙述になっていない。そこでは、客人を歓待した側に立ってその幸福なる結果を中心に叙述されている。それは、現存の事物の起源を説明する伝説の特性からそうなるのである。弘法大師の伝説についても、そこでは大師を歓待したことによる幸福な結果か、大師を歓待しなかったことによる不幸な結果かのどちらかが伝えられ、その両者が伝わっていることはまずない。

富士筑波型の伝説が隣の爺型の昔話になったのが、「猿長者」の昔話である。大歳の夜、金持ちの家へ乞食坊主が来て宿を乞うが、断わられる。そこで、隣の貧しい老夫婦の家を訪ねると、泊めてくれる。泊めてもらった坊主は、老夫婦のためにごちそうを出し、翌朝出発するときに、二人の望み通りに、湯を沸かしてその中に二人を入れ若返らせる。金持ちの夫婦はそれを聞いて、貧しい老夫婦の場合と全く同じ様に、坊主に来てもらい湯の中に入るが、猿などの動物になってしまう。ここでは、乞食坊主が泊まることを拒絶した反主人公が、主人公の幸福な結末を聞いて、乞食包主を泊めるという主人公と同一の行動をして、不幸な結果に陥っている。そこには、富士筑波型の伝説から図1で表せるような隣の爺型の話が形成されていく形態がうかがえる。

それから、「大歳の客」のB型と同一のものとして、「大歳の火」の話がある。大歳の晩に大家の女中が炉の火種を絶やしてしまう。あるいは、東日本に多い話だが、姑にいじめられている嫁が、姑の意地悪で炉の火が消されてしまう。困った女中ないし嫁は葬式行列の提灯を持った人から火をもらう。その代わりに棺桶を預かる。あるいは、山で鬼のような恐ろしげな男が火に当たっていて、火をもらう代わりに棺桶を預るという場合もある。そして、その棺桶を開いてみると、金が入っていたというのである。それで、嫁と姑が仲良くなったなどと語られる場合もあり、そこでは現実の人間関係に関心が移っている。また、その女中がその金で寺を建て、観音に変身したという話もあり、観音信仰と結びついている場合もある。こうした死骸が黄金に変わる話と観音信仰が結びついている例は、すでに今昔物語巻十六の第二十九にも見られる。この話は死骸が黄金に変わるものであるが、さらにそれと実際に乞食などの異人が殺害される「こんな晩」などの事実譚とのつながりも指摘されている。(5)

さて、「取っ付く引っ付く」の話と「大歳の客」の話とそれに関連した昔話の関係を図で示すと図2のようになる。〔1〕の系列が「取っ付く引っ付く」の話の型、〔2〕の系列が「大歳の客」の話の型である。

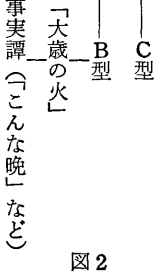

図2

ここで、「取っ付く引っ付く」の話と「大歳の客」の系列の話の相違について考える。「取っ付く引っ付く」の話では、富をもたら

すものが人間の住んでいる所の外側に存在してそこへ人間が移動していくのに対して、「大歳の客」の系列の話では、富をもたらすものが人間の住んでいる所の外側の世界から人間の世界へと移動している。そして、その富をもたらすものが、「取っ付く引っ付く」の話では、その姿は現わさないがその声はいつも一定であるのに対して、「大歳の客」の話では人間の姿をしているが黄金に変化してしまう。こうした変化は「猿長者」の話でも見られるが、そこでは人間の側が老人から若者へとあるいは人間から動物へという具合に変化している。また、隣の爺型になった場合、「取っ付く引っ付く」の話では、反主人公に与えられるものは、主人公が獲得した黄金ではなくてそれが変化して松脂などになっている。それに対して、「大歳の客」の話では、主人公の場合と異なり、反主人公のときには異人は黄金に変化しない。「猿長者」の話では、異人によって、主人公のように若返らず猿に変えられてしまう。それから、「大歳の客」の話では、その出来事が起こるのが大歳の夜という季節と時間が特定化されているのに対して、「取っ付く引っ付く」の話では、その出来事が起こるのは、C型に夜というのが見られるだけで季節などは限定されていない。

四

これまでの昔話研究において、昔話を神話的叙述からの派生展開ととらえる見方が主流をなしてきた。しかし、昔話に神話・伝説と同じ要素を見つけて、それを古代信仰の残留と解釈するだけでは、昔話を昔話たらしめている特質をとらえたことにはならないだろう。そこで、神話・伝説とは異なる昔話の想像力の営みが問題となる。[6] 昔話の伝説と異なる特性として、柳田国男は、発端の句や結末句などに見られる語りとしての形式性、[7] 固有名詞の省略などに見られる現実の捨象などを指摘している。あるいは、ヨーロッパの昔話についてではあるが、マックス＝リュティは、人間と超越的存在の間に次元の差がないという一次元性、物・肉体・環境・諸関係・時間などの叙述に見られる平面性、要素をすべて純化してしまって世界中のものは何でも受け入れることができるという含世界性を指摘している。[8] しかし、昔話がはじめからこうした特性をもっていたのではなく、他のジャンルと異なる昔話独自の想像力の営みの蓄積の上にこうした特性が育っていったのである。

本稿で、「大歳の客」と「取っ付く引っ付く」の昔話をとりあげたのは、そうした昔話を昔話たらしめている想像力の営みについて具体的に考えたかったからである。「大歳の客」の昔話は「猿長者」の昔話を介して富士筑波型の伝説につながるものである。一方、「大歳の客」と「取っ付く引っ付く」の話は構造的に対応し、それは日本の昔話の中で大きな割合をしめる隣の爺型の原型になっている。また、一方で異人殺害の事実譚にもつながっている。こうして、構造の面では、異人歓待の伝説から隣の爺型の昔話まで一つながりのものとしてとらえられるわけである。しかし、ここで問題としたいのは、こうして昔話が伝説とは異なる独自の形式を完成していく過程で、その登場人物の属性やその行動の性質がどのように変化していくかということである。

隣の爺型の話については、主人公はまめであるから成功して反主人公は貪欲であるから失敗したというように、これまで主人公と反主人公の属性の対立に主に関心がもたれてきた。しかし、隣の爺型

の話の面白さは、主人公が富を獲得するのに成功したのに対して反主人公は失敗するという対照的な構造にあり、そうした対照的な構造を成り立たしめているのが、富を獲得するという行為である。ここでは、その富を獲得するという行為に焦点を絞って考えていこう。

これまでの分析によると、富をもたらす存在については、伝説では神のような神聖な超自然の存在ではっきりした形態をとっているのに対して、昔話では乞食や殿様のような人間とか猿や鼠や雀のような動物あるいは鬼のような妖怪であり、「取っ付く引っ付く」の話のようにはっきりした形態をもっていない場合もある。そして、伝説では超自然の存在によって外部から人間の世界へ富がもたらされる。それは「大歳の客」系列の話や「花咲爺」「雁取爺」の話でも同様であるが、それ以外の隣の爺型の話では、人間の側が逆に外部の世界へ移動してそこで富を獲得する。また、獲得される富は、伝説ではその共同体全体の過去から現在に至る豊穣であるのに対して、昔話では個人的なものに変わっている。しかも、それは、「猿長者」の話の若返るということを除けば、黄金や大判小判などの貨幣になっている。さらに、その富を獲得する時期であるが、富士筑波の伝説ではにいなめの夜であり、「大歳の客」系列の話では大歳の夜であるが、「取っ付く引っ付く」の話や他の隣の爺型の話ではそうした季節的限定がなくなっている。

こうしてみると、昔話に見られる富の観念というのは、伝説の基盤となっているものとは明らかに異質なものへと変わっているということが言えよう。どちらも、個人の努力によって富が作られるという近代的思考とは異なり、人間の力を超えた外部の異界から富がもたらされるという考えが背景にあるという点では共通である。しかし、伝説の基盤になっているものは、一年の中の一定の期日に異界から異人が人間の世界を訪れて、それによって共同体全体の豊穣がもたらされるという客人信仰とでも言うべきものである。それに対して、昔話では、もはや富を得るのに季節的限定はなくなり、人間の側がただひたすら物忌をして異人の訪れを待つというような信仰は崩れている。そして、そのもたらされる富は、伝説では異人によってその存在が人間に保証されている。そして、人間がタブーを犯すと、異類女房譚や「竜宮童子」の昔話に見られるように、人間の側には永久になくなってしまうのである。それに対して、隣の爺型などの昔話に見られる富は、超自然の存在によって与えられたものでなく、したがってその永続性は保証されず、時間性を欠いたものになっている。主人公によって獲得された富がその後どうなったかは全く語られない。また、その富は共同体の中の誰でもが所有できるものではなく、共同体が分裂して富を獲得することができる者とそうでない者とが存在する。こうした伝説の基盤になっているものとは異なる新たな富の観念が生じてはじめて、隣の爺型の昔話は形成されたわけである。

このようにして異人が異界からやって来て富をもたらすという信仰を喪失した昔話は、想像力を働かせてその富のありかとしての新たな異界を作り出さなければならない。例えば、それは「鼠浄土」の鼠の世界であり「舌切り雀」の雀の世界である。しかし、根の国と関連のある鼠のような動物が登場しても、それは全く人間の世界からはるかに離れた所に存在しているのではなく、山中でころがった握り飯を追っかけて行けるような距離の人間の住んでいる所の周

辺に存在する。「地蔵浄土」の話で、空想の存在である鬼が博打をしているのも、山のお堂やお宮である。このように、隣の爺型の昔話では、人間の住んでいる所の周辺の空間が大きな意味をもってくる。「取っ付く引っ付く」の話で化物の出る場所は山の中であり、こうした場所が隣の爺型の昔話の異界の原点になっているのだろう。こうした境界的な場所に想像力を働かせて、それと隣り合わせに異界が出現する。

これまで、富とか空間について人々のいだく世界観が、昔話が構造の上でその形式を完成するのにどのようにかかわっているかということについて論じてきた。しかし、それだけではなく、昔話を昔話たらしめているものとして、人々の文芸に対する意識の変化すなわち口承文芸を信仰的な背景を離れて娯楽として鑑賞する態度が生まれたことがあげられる。そうした文芸に対する意識は、隣の爺型の話で主人公の行動と全く同じように反主人公の行動がくり返されるところにもうかがわれる。しかし、それはこうした話全体の構造だけではなく、もっと細部の語り口にも顕れている。「取っ付く引っ付く」の話では、化物が「取っ付くか引っ付くか」という声によってだけ表されるが、こうした声に対する過剰な意識は、「鼠浄土」や「猿地蔵」の話の鼠や猿の歌、あるいは「竹取爺」「雁取爺」の話の主人公の屁の音にも見られるものである。

このように昔話は単なる神話の残留なのではなく、さまざまな要因によって、昔話独自の様式を確立していったのである。そして、こうした昔話がその特質を完成していく過程を追求することによって、書かれた文芸作品からうかがうことのできない、日本人の表現の歴史とでも言うべきものが発掘できるように思う。

注

1 拙稿「昔話の叙述の展開とその構造—異類女房譚を例として——(『三田国文』第六号所収。昭和61年)

2 個々の話型については、関敬吾『日本昔話大成』(昭和54年、角川書店)によっている。

3 水沢謙一『とんと一つあったてんがな—越後の昔話—』(昭和33年、未来社)に収録された話などである。

4 柳田国男『桃太郎の誕生』(昭和8年、三省堂、『定本柳田国男集』第八巻所収)

5 小松和彦「異人殺しのフォークロア」(『異人論—民俗社会の心性』所収、昭和60年、青土社)

6 益田勝実「民話の思想—伝承的想像の超克」(『伝統にと現代』第38号民話特集所収、昭和51年)

7 柳田国男『口承文芸本史考』(昭和22年、中央公論社、『定本柳田国男集』第六巻所収)

8 マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話』(小沢俊夫訳、昭和44年、岩崎美術社)

9 例えば、佐竹昭広『民話の思想』(昭和48年、平凡社)などである。